日ロ交流

発行: 特定非営利活動法人日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page: http://www.nichiro.org
〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14
麻布台マンション401号
Tel：03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752

ロシアの家庭料理講習会

長島 さくら

7月29日、ロシアの家庭料理講習会に参加させて頂きました。今回はсвекольник（ビーツの冷製スープ）とазу（タタール式肉の煮込み料理）を作りました。講師は、日本のロシア料理店などで勤務されながら10年以上日本に住んでいらっしゃるマイヤ・ノイ先生です。先生が到着すると、早速スープの調理から始まりました。作り方は普通のボルシチと同じような感じかな...？と勝手に想像していたのですが、このсвекольникはビーツの出汁からスープを作り、また具材も異なる料理でした。後日ロシア人の友人に聞いたところ、холодный борщと呼ばれる夏のスープもあり、こちらは一般的に肉のブイヨンから作るそうです。свекольникの作り方はとてもシンプルで、沸騰させた湯（火は止める）に、茹でたビーツ、ジャガイモ、ゆで卵、ハム、キュウリ、大根、様々なハーブ（ビーツの若葉、ディル、パセリ、ネギ）を細かく切って入れ、後は冷めるまで待つだけです。「飲むサラダ」とも言われているそうで、暑さで食欲が無くなる時にもぴったりな料理だと思いました。また具材が冷やし中華やそうめんのトッピングとも一部似ていて、ロシアでも日本でも、同じ食材を使い夏の食事を楽しんでいるんだなと感じました。

スープを冷ましている間、次にазуを作りました。牛肉ブロック、玉ねぎを細切りにし炒めたら、水、トマトペーストを加えしばらく煮込みます。そこに別鍋で炒めたジャガイモも加え、さらに煮込んだら完成です。先生が各班に何度も回って来て下さり、日本語・ロシア語両方でポイントや煮込み加減を教えて下さいました。「нарезать ~ соломкой（～を細切りにする）」「３зубчика чеснока（にんにく3片）」といった料理特有の表現も勉強になります。調味料は塩、こしょうなどシンプルなものの、途中で入れる刻んだキュウリのピクルスが味のアクセントとなっているようで新鮮でした。

今回の参加者は、先生以外は全員日本人でした。私の班では、昨年夏にサンクトペテルブルクに留学された方もいれば、ウラジオストクへ旅行の計画を立てた矢先にコロナ流行が始まり、結局まだ一度もロシアに行けていないという方もいました。私自身もコロナの影響で留学を中断しロシアから帰国したので、お互いの背景は違えど、同じような思いを持ちながらここに集まってきたことを感じました。

完成した料理は、マヨネーズやスメタナを使った先生特製のソースをたっぷりかけて頂きました。свекольникは最初は透き通ったビーツの赤紫色、ソースを混ぜると鮮やかなピンク色になり、見た目も味も爽やかでした。азуも食べ応えがあり美味しかったです。タタール料理というと、чакчак（揚げた小麦粉生地に蜂蜜をかけ固めたお菓子）は留学先でもスーパーで手頃に購入でき馴染みがありましたが、それ以外は全く知らなかったので、新しい料理を学ぶことができ嬉しかったです。

余談ですが、もう一つロシアの夏のスープといえば、留学中に食べたокрошка（クヴァスやケフィールを使った冷製スープ）を思い出します。5年前の8月、留学先のリャザンに着いた初日に街へ出かけた際、イベントで無料で配られていたのがокрошкаでした。地元の人たちに混じって初めて食べたその味は何とも新鮮で、「これからここで留学が始まるんだ」というドキドキと共に味わったことを今でも覚えています。

свекольникとазуも、今度はいつかロシアのどこかで食べられる日を楽しみにしたいと思います。マイヤ先生、講習会の企画・運営をして下さった方々、参加者の皆様、ありがとうございました。

お知らせ

●ロシア語の泉（8）
日時：2023年9月24日,10月22日,11月26日(日)13：30～16：00
会費：一般8000円、会員7000（3回、計7.5時間）
場所：JR田町「リーブラ」
講師：スニトコ・タチヤナ

●マトリョーシカ絵付け教室
日時：2023年10月14日(土) 13：30～15：30
講師：菅野エレーナ
会費：3000円（教材込み）
場所：JR田町「リーブラ」造形表現室
＊緊急連絡先を添えて、前もってお申込みください。

●ロシア語クラス生徒募集中！！
水曜初級1A-1（19：00～20：00）1A-2（20：05～21：05）
土曜上級（10：00～11：30）オンラインクラス**月曜**準中級（18：00～19：00）プライベートクラスもあります。
会員の方のための講座です。見学も可能ですが、変更の場合もありますので前もってお問合わせください。
事務局：Tel:03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。
振込先:郵便口座 00160-9-66486、加入者：日ロ交流協会
連絡先:日ロ交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org
＊なお、お振込みの際に、**寄付であることがわかるようにお名前の前に数字「01」とお入れください。** どうぞよろしくお願いいたします。

イワン・クパーラin高尾山

安部 花子

8月5日、高尾山の日影沢キャンプ場でのイワンクパーラに参加しました安部と申します。コロナ前の2018年に開催された猿島での開催から足掛け5年、この間も何度か開催はあったものの、ピンポイントに予定が入ったり、私自身がコロナに罹患したりとタイミングの悪い年が続き、今年こそは這ってでも参加するぞ！と意気込んだ、待望のイワンクパーラでした。

今回は15名ほどの参加で日本人参加者が8割ほど。ロシアのみならずイランから来たアゼルバイジャン人の方もいて国際色豊かなメンバーです。当日は暑い一日でしたが、その名のとおり木陰が多く過ごしやすく涼やかな小川もあるオアシスのような穴場スポットでバーベキューを楽しむことができました。高尾駅からのアクセスも良く、木漏れ日の清浄な空気に満ちた歩きやすい小川沿いの遊歩道が続き、さながらミニ奥入瀬渓流と言ったところ。ロシア人参加者の方も時折立ち止まって美しい自然をスマホで撮影していました。子供の頃、よく家族で山に行って川遊びをしたことを外国人の参加者の方に話すと、故郷の土地にも似たような場所があり、よく家族で遊んだのを思い出したと、全く違う国で育ったのに同じようなノスタルジーに浸れることを嬉しく思いました。

キャンプ場に到着後、みんなで食事の支度を始めます。お肉を串にひたすら突き刺していく作業！皆で作業台を囲んで、無心に黙々と。私はこの岩橋理事お手製の味付け肉が本当に大好きで毎年楽しみにしています。どうやったらあんなに肉の旨味を増して臭みだけを取れるのか不思議です。そして今回は、バーベキュー以外にももう一つの目玉が。岩橋理事がテントを持参し、なんとバーニャ（ロシア式サウナ）をオープンしてくれることに！しっかりと高温・湿度が保たれたかなりの本格派で、ロシア人にも日本人にも大好評でした。小川での沐浴とセットで「ととのった」後、みんなで夏の風物詩・スイカ割りを楽しみました。

今回は浜辺では無いので、みんなで焚き火を囲んで踊ることや花冠を海に放つことはできなかったのですが、歌の専門学校に通っていらっしゃるアゼルバイジャン人留学生の方とチェチェン、ジョージア等多彩な舞踊が特技の日本人の方が本格的な歌唱と舞踊を披露して下さいました。美しい演技に、その方面の文化に詳しく無い参加者も興味津々。ダンスが終わった後、熱心にインタビューしているロシア人の方も。歌詞や振り付けの意味は分からなくても、国籍の垣根を超えてとても盛り上がり、素晴らしい時間を過ごせました。

伝統的なイワン・クパーラにおける焚き火を囲んでの踊りとは皆で心一つにお祝いをすることなのだそうで、今回もしっかりと実践できたかと思います。ちなみに、イワンクパーラのクパーラとは「水に浸す」（＝洗礼をする）ことなのだそう。踊りが終わった後火照った足を小川で冷やしながらのんびり語らい交流を深めた私たちは、図らずも本格的イワンクパーラを「完全再現」してしまっていたようです。

国籍・性別・年齢を問わず誰でも参加できる交流協会のイワンクパーラは、毎回参加者の顔ぶれによって雰囲気や内容がガラッと変わり、予想もつかないような楽しいことがたくさん起こります。私が毎回参加してもちっとも飽きないのはまさにその点です。これからも、政治や国際情勢から一歩引いたところで、人と人との交流を無邪気に楽しむことができる開かれたイベントを継続していただきたいと思います。開催にあたり企画・準備して下さった運営の皆様、本当にありがとうございました。素晴らしい夏の思い出を作ってくださり、感謝申し上げます。

スベトラーナさんの手芸講座

笠原 以津子

8月の初めに、スベトラーナ先生によるコサージュ作りのワークショップに参加してきました。「前回これを作りました」と、コサージュの写真を千葉さんが見せてくださり私にできるか不安でしたが、次回は筆で塗って作るという点に興味を持ったので、生け花をしている友達を誘って参加しました。

私は友禅をしているので、細かい作業が得意で器用だと思われがちですが、小さい頃から苦手でした。幼稚園の時は折り紙が、学校では運針が、今は、野菜のみじん切りなど大の苦手。今も昔も、細かくきちんと揃えてきれいにするのが苦手。友禅は度胸があればできるし、きちんと揃えなくても適当に出来るので向いているのです。

スベトラーナさんは、手作りのワンピースを着られたり、素敵にコサージュをつけて、いつも手作りのおしゃれをなさっています。私も婦人デーに素敵なコサージュを、手作りのパッケージの箱と一緒にいただきました。もの作りが大好きなのですね。

見本のコサージュは2種類あり、簡単な方を選びました。まず、好きな色のサテン生地を選び、用意してくださった型紙に合わせて花びらの形に鋏で切ります。花びらと葉のカットが終わると、切り口を何と蝋燭で炙って解れないようにするのです。蝋燭を使ったのはいつの事だったかしら。最近は仏壇でも使わず仏壇用のライターが置いてありますね。蝋燭の炎に生地を近づけ、ゆっくり炙っていくのですが、これがとても怖いのです。ゆっくり炙って下さいと言われましたが、ゆっくり炙ると生地と手が燃えてしまいそうだし、急いで炙ると生地に蝋がついてしまったり、黒くなってしまいます。炎のどこに生地を当てるかもポイントのようです。後半は先生が炙って下さいました。

次は彩色。蝋燭で強く炙ってしまった所には絵具が乗りません。最後に縫製です。5枚１組を2セットと中心に置く糸で縫って縮めたものと、形作りながら糸で大胆に縫い付けて花にします。そして、後ろには葉の形に切った緑色のオーガンジー生地。全てを糸でまとめ、裏側から接着剤で止め、ブローチ用のピンも止めて・・とてもきれいな花のコサージュが出来上がりました。最も半分は先生がして下さったので、きれいなのは当たり前ですね。ただ、最初に色差しをした花びらの色がきれいに表に見えていなかったので職業柄完成にはしたくなく、家で全面パープルとブルーのぼかしを入れた花に仕上げました。

それにしても、蝋燭で炙るという縁の止め方。一緒に参加した友達もこれには驚いていました。日本で布の造花作りはどうしているのかと調べましたら、つまみ簪のように切り口が表側に出ないようにしたり、2枚の生地を縫って裏返しにする等、火で炙るというのは出てきませんでした。ロシアでは日本よりも蝋燭が身近なものなのでしょうか。蝋燭の歴史が気になり、少し検索してみましたが、西洋には紀元前3世紀には存在していたようで日本で最初に登場したのは奈良時代で、中国から仏教の伝来と共に伝わってきたそうです。歴史の長さも違いますし、近代でも日常で使われているのは西洋ですね。

コサージュ作りに参加したお陰でそんな事も知る事ができましたし何よりも友禅以外で物づくりの達成感を味わう事もできて、それがとても新鮮でした。スベトラーナさんの手作りのお菓子のお土産つきで、大満足な１日でした。 (理事)

植物学者マキシモヴィッチ（1827－91）と日本

倉田　有佳

朝の連続テレビ番組の影響もあり、マキシモヴィッチへの関心が高まっている。カール・マキシモヴィッチ（1827－91年）は、トゥーラ生まれのバルト・ドイツ人で、父ヨハンは医師だった。現エストニアのタルトゥ大学の前身のドルパト大学で医学と植物学を学んだ後、サンクトペテルブルク帝室植物園に勤務し、そこでの任務として探検隊に加わりロシア各地方の植物を調査することになる。

1853年秋、軍艦「ディアナ号」で世界周遊に出る。同艦は老朽艦「パルラーダ号」の代替船で、出港地クロンシュタットからは、後に在函館ロシア領事館付属聖堂の初代司祭となるワシーリ・マホフを、到着先のニコラエフスクからはプチャーチン提督一行を乗せ日本へと向かった。採集調査を終えたマキシモヴィッチは陸路で帰還し、1859年に出版した『アムール地方植物誌予報』は栄えあるデミドフ賞を受賞した。

同59年、2回目の極東調査へ出かける。シベリアを横断し、ウラジオストクからは「グリーデン号」に乗り、1860年9月18日函館に到着した。ロシア領事館のアルブレヒト医師とは大学の同窓で、函館滞在中は共に植物採集に出かけている。

興味深いのは、ドイツ語で書かれたマキシモヴィッチの「旅日記」で、完成間もない領事館の外観のすばらしさだけでなく、「小さな壁掛け、絨毯、家具などがきちんとしつらえていた。ただ残念なことには、汚れ、なげやりになっていたことである」。領事館のフィンランド人とロシア人の女中は、「家族によく馴れていた」が、孤独をまぎらすかのように「人目を忍んで暇をつくって酒を飲み、昂じて度を越すようになっていた」（井上幸三『マクシモヴィッチと須川長之助（増訂版）』1996年）などと、領事館内の様子や人間模様も描かれてている。

マキシモヴィッチ肖像写真（北大大学文書館所蔵）（『北海道大学総合博物館企画展示「花の日露交流史―幕末の箱館山を見た男」図録　マキシモヴィッチ・長之助・宮部』2010年）

開港地での遊歩区域は十里（函館では五里）と規制されていたため、岩手から函館に出稼ぎにやって来た農家の出の須川長之助に採取方法・標本の調製・花実の写生方法を教え込み、助手をさせた。1864年2月、マキシモヴィッチは横浜から帰国するが、その後も2年ほど長之助に採集を依頼してきた。

1887年、20年振りに採集依頼が伝えられた長之助は、東京の公使館付司祭アナトーリ（チハイ）やニコライ主教の仲介で、ロシアにいるマキシモヴィッチに植物を届けた。1890年5月9日付のニコライがマキシモヴィッチに宛てた手紙からは、アナトーリ司祭が過度なまでに協力していたことや、病気で帰国したアナトーリ司祭ほど自分は協力できない、といった意思表示が読み取れる。その翌年、マキシモヴィッチはインフルエンザで急死した。

植物以外にも向けられたマキシモヴィッチの鋭い観察眼、彼を陰から支えた人々の姿が印象的である。　（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

ハリコフ―モスクワ（1）

浜野　道弘

ウクライナ第二の都会で一時期（1917-1934）ウクライナの首都でもあったハリコフを日本でもウクライナ語でハルキウと呼ぶ人がいる。しかし、かの地の住民の大半はロシア語話者でもありとりあえずハリコフとしておく。[1]

昔からウクライナとロシア間の交通はキエフ（これもキーウか）方面が水運頼りでハリコフは陸路であった。チェーホフは「桜の園」で「乾したサクランボが何台もの荷馬車に積まれてハリコフからモスクワへ送り出された」時代のあったことを示唆している。1852年になってハリコフ―モスクワ間で駅馬車が走り始めたがじきに鉄道に取って替わられた。

いまから4-5年前まではハリコフ中央駅とモスクワのキエフ駅を往復する国際列車が1日2-3本共同運行されていた。ハリコフ―モスクワの道のりはモスクワ―サンクトペテルブルク間より100kmほど長い781km、14時間半の旅で便利であったが、いまはすべて不通である。

ロシアとの国境がハリコフの北わずか38kmにあるため、2022年2月24日ロシア軍の侵攻開始以来ロシアの砲弾やミサイルが容赦なくハリコフに飛来し住民に多数の犠牲者が出ている。ハリコフ―モスクワの道行きを語るどころではなくなってしまった。

ハリコフはコサックが礎を築いたウクライナの町であるが、ウクライナ色が総じて薄い。「桜の園」はハリコフ近郊に想定されるが、19世紀末のハリコフ近郊の住民はおおむねロシア語話者であった。「桜の園」にはウクライナを想起させる表現や事柄は全く見当たらないし、チェーホフはそうしたエスニックな消息を語る仕立てに関心はなかった。

チェーホフの「桜の園」の「桜」はロシア語で「Вишня」（ヴィーシニャ）と呼ばれるミザクラの一種で寒冷地では自生しない。ハリコフ近郊が北限である。[2]　5月には白い花が咲き乱れて夜をも白くする「桜」の木立は「領地喪失」と向き合う劇作にとって格好の舞台装置である。120年前の初演からも今にいたるもロシアの観客の多くは「桜の園」に「ロシア南部」の風情を感じるという。

作品はディテールにいたるまで何事も揺るがせにしないチェーホフにとって「桜の園」はハリコフ以外の他所にはない。しかし、ハリコフはウクライナであって「ロシア南部」ではない。この名作はこれからウクライナの劇場でどのように演出されるだろうか。

1 本稿で使用する国名、地名は歴史的名称にこだわらずそれを承継した現在名とする。

2 ロシアには「Черешня」（チェレーシニャ）「セイヨウミザクラ」と呼ばれるサクランボもある。同じミザクラの一種であるが北限がより高く、「Вишня」（ヴィーシニャ）「スミザクラ」が小粒、紅色で加工用であるのに対し、大粒、暗紫色で生食用として好まれる。この二つのサクラは花をめでる「桜」とは種類が違い、日本の「桜」が持つ「散りゆく潔さ」などの独特の語感はない。そのため「桜の園」という和訳の題名に異を唱える意見がある。

野口芳雄氏/陽一氏の思い出（その3）

畔上 明

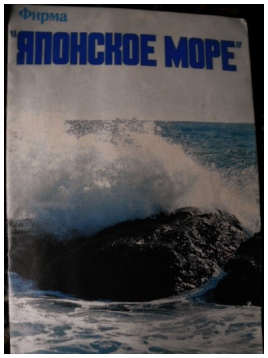
年が明けての1974年春大学卒業と同時に新社会人として「日本海貿易」株式会社に通うこととなりました。六十名程のスタッフがワンフロアーに机を並べています。配属先は木材部受渡課、私達の課長岩井氏はロシア語のみならず言語学者のような幅広い知識を持った勤勉家タイプでいらして、先ずはタイプライタ練習方法と貿易実務のイロハを懇切丁寧に教えて頂きました。

受渡課は総勢七名、向いの席には面接試験のときにスーツを貸してくれたMくん、長崎出身のスマートな好青年で、仕事を終えるや一緒に飲み歩く日々となりました。彼ばかりでなく先輩スタッフの多くが奈良のT大卒で即戦力として役立つ実用ロシア語を習得してきていて、私のような文学部で辞書を引き引き講読ばかりにうつつを抜かしロシア語会話など尻込みをしてしまう者などは圧倒されてしまう空気感がありました。

社長の野口芳雄(1904-98)氏は、ご子息の野口陽一氏と物腰も似て七十歳近くながら温厚で人の好さそうな方であり、元々は外交官でいらしたこともあるだけに叩上げの企業戦士とは違った品格のある紳士でした。

さらに、伊東直専務は社長同様ハルビン学院でロシア語を学び外務省ご出身、週の二日程は上智大学で講師をされておられ、片やべらんめえ調とでもいった抑留先で覚えたロシア語隠語をついロにするシベリア帰りのむさも多くみうけられ、個性豊かな集団であることが徐々に見えてきたものです。

野口芳雄社長は新入社員に国際的なマナーを身につけてもらいたいとフランス料理店「四季」に我々を招いての会食、そこでは、かつてのソ連第一副首相であったミコヤン(1895-1978)と懇意にしていた話などを語って下さったのでした。



「日本海貿易」株式会社 会社案内冊子

貿易会社を興すにあたっては日本とロシアとの懸け橋になってほしいとの思いを込めて社名をФирма Японское Море（日本海）としたら如何かとミコヤンが名付け親になってくれたエピソードが印象的に残ります。

小さな会社ながら組合活動も行われ、組合新聞に映画に関する記事を書かせてもらったり、ビル全体の社員食堂がある地階で終業後、主に女性たちが活動する生け花教室に参加させてもらうこともありました。

飲み会が開かれると、社員のカラーが如実に表れ、飲めや唄えやの唄が歌謡曲などではなくロシア民謡が次々披露されたのです。特に思い出すのは夫婦仲睦まじいと思われた社内一真面目な印象のスタッフが「私を責めないで」のロシア語歌詞を切々と唄い上げて、あとで奥さんに逃げられてしまっていた事情を耳にし歌に殊更哀愁が漂っていたことが理解出来たものです。

同期であるMくんからはアパート先で歌唱力抜群の美声を聴かせてもらったり、サクソフォンの名演奏に驚かされたり、杯を酌み交わせば豊富な話題を提供してくれたりで、その後生涯の友となったのでした。

福島の五色沼へ社員旅行で出掛けた時には、野口社長を中心として社員が見事に一つに纏まる家庭的な雰囲気が醸し出されたものです。

入社時点では最高益を上げていたという会社でしたが、1973年秋に勃発した第四次中東戦争による影響からオイルショックが始まったことで、急転直下の大赤字を抱え込むことになるとは誰が予測出来たでしょう。

着物体験交流（大使館編・1）

千葉 麻里

6月20日（火）13：00からロシア大使館2階ホールで、恒例のきもの体験交流（第1回）を実施しました。大使館から前もって提出されていたリストでは、女性17名、男性10名、女児4名、男児1名の計32名。30分毎に約6名ずつの着付けに調整されていました。

今年、来日されたタチヤーナさんは大変行き届いた方で、事前打ち合わせがしたいということでお会いして色々お話させていただきました。大使館側で用意する物を遠慮なくいってください、とおっしゃられたので、敷物、タオル（女性用に一人1～2枚）をお願いしました。振袖などのきもののダンボール2つを、普段は宅配便で送りますが、今年は大使館からすべて車で取りに来てくださったので、当日はほとんど手ぶらで行くことができました。

広い敷物の上に、女性用、男性用、女児用、男児用にそれぞれセットした風呂敷を広げ、補正用のタオルを使ってベテランの先生方と手早く着付けができました。日頃、仕事でご一緒することの多い、五十嵐、辻田、森先生と私の教室の佐佐木さんとで5人での着付けです。

着付けの合間に、隣のホールに飲み物や様々な手作りの菓子が用意されていたので、先生方は大喜びでした。シェフの作った本場のピロシキや、珍しいメレンゲ菓子やムースやケーキなどが疲れを吹き飛ばしてくれました。そして、シェフ自身も袴を体験していかれました。

大広間は撮影スタジオになっていて、小物や幕が準備されていたので、ご家族で記念撮影をして十分楽しんでいらっしゃったことでしょう。

通商代表部も含め、一昨年あたりから男性の希望者が増えており、体格のいいロシアの男性に着せられるきものを用意するのが大変です。その上、男性は5歳男児用と成人用を着付けることが多く、10～15歳くらいの男の子のきものはなかなか手に入ることがないので、成人用で何とか間に合わせました。男の子も凛々しくてきものが映えます。

大使館の皆さんの喜ぶ様子を拝見するだけで、着付けの先生方の顔もほころんでしまいます。その上、おもてなしあり、最後に持ち帰り用もご用意いただきました。タチヤーナさんはじめ、大使館の皆さんに心から感謝申し上げます。着付けの先生方もありがとうございました。　（副会長）